ねこぬこっ！

羽崎 暮斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ねこぬこっ！

【Ｎコード】
Ｎ８９９２Ｚ

【作者名】
羽崎　暮斗

【あらすじ】
ある雨の日、俺は一匹の黒い子猫を拾いました。
妹が『クロ』と名付けたその猫は、なぜか妹ではなく俺に懐いて、拾った日の夜、一緒に寝ました。

朝起きたら、横に居たのは、一言で言うなれば『美少女』でした。
しかも全裸の。

甲斐性の無い俺が、全力で叫ぶ所からこのお話は始まります。

これは、一匹の（一人？）の黒猫と、『Ｍｒ．平均値』な主人公の、ほのぼの系ラブコメとなります。派手な戦闘や、魔法や特殊能力なんてものは、一切とはいいませんが、ほぼ出ません。

第一章『ねこ？ネコ？猫……だったよね？』（1）

――――――状況を整理しよう。

俺は篠原（しのはら）　優斗（ゆうと）。１６歳高校生。

背丈も顔もスポーツも勉強も財力も権力も……何もかもが平均値。

『順位』というものが存在する物事においては、俺より上ならば、

「まぁまぁまぁ、平均よりは上か」なんて言われる始末。

顔は……高校に入ってから若干目付きが悪くなってきた……ような気がする。

え？自己紹介を兼ねた自己確認は要らない？

もうちょっと待ってくれ。こんな事から確認したくなる状況なんだ。

なんなら、自分はどの様な行程を経て生まれたのかすら確認したい。

……いや、やめておく。『両親の×××』は、人生のトラウマ第２位だ。むやみに掘り返すべきでは無い。

今は１０月。季節は秋。

焼かれる様な暑さはすっかり無くなり、風も心地よい。なんなら肌寒いくらいだ。

俺にとっては、暑くも寒くもないから、最高の季節である。

確か昨日は雨が降っていた。

朝から、この時期に珍しく土砂降りで、学校をサボろうか……４回考えた。

結局一日中降っていて、帰りも、このまま学校に泊まってしまお

うか……6回考えた。
当然、泊まるわけにいかないので、部活が休みになった友人、高杉と帰路につき、自宅近くの商店街入り口で別れた。

唐突だが、ウチには両親が居ない。
両方とも、外資系コンサルタント企業で働いていて、父親の方がそこそこの地位にいるらしい。詳しくは知らない。
母親はその秘書。
ざっくり言えば、父親が遠くに異動になり、母親も秘書としてついて行くことに『した』らしい。
そこそこの地位に居るなら、異動なんてあるのか？秘書の融通がきくのか？これが権力か？
……大人の世界はわからない。

んで、こうなると当然、『引っ越し』という難関が立ちはだかる。
俺と『妹』はこれを全力で拒否。確固たる意思に基づき拒否。
両親にとっては予想通りの反応だったらしく、4年程前に建てた、比較的新しい我が家を空けてしまうのも悩ましいところだった様だ。
結論↓『優斗が居れば大丈夫よね？　2人だけで行っちゃいましょ、あ？な？た？』
篠原優斗、2歳年下の妹の美咲と共に、一戸建ての我が家に取り残された……中3の冬。

話戻って。
そんな我が家の本日の夕飯を考えながら、商店街で買い物をした。
金は困らない程度に仕送りをもらっている。
途中、八百屋のおっちゃんにトマト（妹大っ嫌い）を3つ貰った。
魚屋のおっちゃんにも、アジを一匹貰った。
社交性はある方だと自負している。

――――――自宅への帰り道、もう目と鼻の先という所で、一匹の真っ黒な子猫に出会った。
電柱の下に、ダンボールに入れられ、放置されていた。ご丁寧に、雨に濡れない様、傘まで置いて。
それでも猫は濡れていて、今夜は冷えるだろうから、危ないんじゃないかと思って連れて帰る事にしたんだ。
両親が居ないし、借家でもないので、『返して来なさい』なんて言われる心配はなかったから。

家に帰るなり、俺が左手に抱えている猫を見た妹が発狂。
嫌いな訳では無い。むしろ真逆。
腰まであるツインテールを、左右にブルンブルン揺らし、大きな瞳をキラキラ…いや、ギラギラさせて大はしゃぎ。
あまりに騒ぐので、猫が驚いてしがみついてくる。
大っ嫌いなトマトを口にねじ込んで黙らせた。

濡れていたので、風呂に入れてやった。
猫は風呂なんてとてつもなく嫌がるものだと思っていたが、まったく嫌がらなかったな。もうすでに濡れていたからか？

その後、夕飯作りに取りかかった。
メニューは、ハンバーグとサラダとアジの刺身。
バランス良すぎてにやけた。
夕飯を作る間、普段は自分の部屋で、某動画サイトに入り浸っている妹は、猫と戯れていた。
ティッシュを細くちぎって、ひらひらさせてたな…。猫ってあの程度でいいのか？
感極まった妹が命名。子猫の名前は『クロ』。黒いからクロ。
シンプルすぎるが、悪くはないだろう。

１９時を回って、夕飯にした。
クロには、牛乳と、アジを５切れ程。
子猫の割にはよく食べたな。やっぱり魚に対するがっつきはすごかった。

２２時くらいまでテレビを見て、自分の部屋に戻る事に。
部屋に行こうとすると、それまで妹と戯れていたクロが、走り寄って来た。
てっきり妹に懐いたもんだと思っていたが、悪い気はしなかったので、自分の部屋に連れて行った。
『お兄ちゃんズルいズルいズルい……』とずっと言われていたが、知ったこっちゃない。

部屋で課題を片付け、インターネットでネットサーフィン。
この間ずっと、俺の左手でクロがじゃれていた。
ネットサーフィンをやめ、本棚から読みかけのラノベを取り出す。
ベッドに転がり、眠たくなるまで読書。これがいつもの生活サイクル。

眠たくなったので、本をたたみ、机に放る。
電気を消し、布団に包まると、クロが枕元に来た。
寝返りで踏んでしまわないか心配したが、頭の横だったし、特に気にしない事にした。
そして眠りについた。

――――――ここまではいい。おかしい所はない。
『変わった事あった？』と、母親に聞かれたら、『猫を拾ったよママン』と答えるくらいだ。

言っておくが、俺は『ママ』とは呼ばない。『おふくろ』だ。

――ではなぜ……。

――なぜ……俺の横に全裸の少女が居る？

長い黒髪。綺麗な顔。幼くは感じない。美咲と同じくらいだろうか。

美咲を『かわいい系』とするなら、この子は『美人系』といった印象を受ける。

美咲と同じくらい、と言う割には、発達のいい身体のライン。

……イカン、これは朝から刺激が強い。

――そして、猫耳と尻尾。

……わからない。特殊メイクか？

わからない。クロはどこへ？

わからない。なぜ全裸？

俺なんかしちゃった？

そんなバカな。俺にそんな度胸はないぃ！
酔った勢い？酒なんて飲めねぇよバッカ！！
ダメだ。散々振り返ったがわからん。
ラノベにはこんなシーンいくらでもあった。
『俺だったらやっちゃうね』とかなんとか、思春期男子らしい、調子に乗った考えについて、作者様に謝罪すべきだろうか。
何もわからない。頭の中で、メリーさんがゴーランドした俺は……。
「――――ッぎゃぁぁぁぁぁあぁぁあぁぁぁぁあああぁぁぁぁ！！！！」
全裸の美少女を前に、『叫ぶ』しか出来なかった俺を、笑いたくば笑えばいいさ。

第一章『ねこ？ネコ？猫……だったよね？』（1）（後書き）

どうもどうも、羽崎にございます（・∀・）
初めましての方は初めまして。早めに戻るボタンを押す事をお勧めしますの（・∀・）

『神理郷』の方に行き詰まりまして…
気分転換に新規投稿（・∀・）

第三者目線を主人公目線に。
ファンタジーを恋愛ラブコメに。

どっちが面白いのか…。
こっちのが出来がいい希ガス↑
まぁ、新しいからでしょう（ ―ω―）

神理郷同様、まったり更新しますので、何卒よろしくお願いしますm（__）m

②

「――ッぎゃぁぁぁぁぁあぁぁあぁぁぁぁあああぁぁぁぁ！！！！」

叫んだ。とにかく叫んだ。
喉が裂けるんじゃないかと思うくらい叫んだ。
ちょっと裏声混じっちゃったよ恥ずかしい。
叫んだだけじゃなく、布団を引き剥がし、勢いよく転がり出た。
ベッドから落ちるわ机で頭打つわで、最悪な目覚め。

「んもぉ～、朝からなに裏声混じりに叫んでんの～？」

妹の美咲が、目をこすりながらドアを開けた。
俺の叫びで起こしてしまった様だ。申し訳ない。

「………………」
「……美咲？」

妹、硬直。
当然っちゃ当然か。一目でわかる異常があるのだから。

――――ぱたん…。

「美咲！これには深いワケが！！いや、ワケがわかんねぇからパニクってんだけど！！ちょっと待ってぇ！！」

病室のドアでも閉めるかの様に、実に静かに閉められた。
どうやらあらぬ誤解をしたらしい。まぁ、誰が見てもそう思うのだろうが。

「……ぁ～…」

妹の背中を追う事も出来たが、誤解を解くよりも、朝のしんどさが上回った瞬間。
きっと今の俺は、ドアの前で『ｏｒｚ』な体勢になっていることだろう。というかなってる。

「どーしたの？」
「いや…美咲の誤解をどうやって解くか……は？」

あれ？女の子の声…？。
…いつの間にか、『ｏｒｚ』な俺の横に、妹の誤解の元、素っ裸の美少女が居た。
同じ体勢で横に並んで、なぜか頭から生えている黒い猫耳をピコピコさせながら、長い黒髪を床に垂らして俺の顔を覗き込んできている。

「おわぁぁぁお！！！」

ｏｒｚのまま転がり、壁にはりつく形になった。ついでにまた頭打った。

「だ、だ、だ、だ、誰らお前！！なんで俺の部屋に居るんだ！！なんで裸なんだ！！」
「クロはクロだよ？……昨日…名前…くれたじゃない」

一瞬だけドモって呂律が回らなかったが、頭の中でランデブー決め込んでる疑問達を口から叩き出す。
するとその少女は、ペタッと女の子座りになり、うな垂れながらボソボソと答えた。
その座り方はやめて欲しい。髪と手で大事な部分は隠れているものの、やっぱり刺激が強すぎる。

「クロ？俺の知ってるクロは猫だ！」

目を手で隠しながら、ありのままの真実を口にする。顔が熱い。

「そんな事言われても……私にもわからないよ……」
「……わからない？」
「うん」
「……」

おかしな事を…。
ただ…俺の部屋の窓は鍵もしまっている。ドアにはかけていないが、家には美咲しか居ないから特に必要はない。
家自体は玄関も当然鍵はかけているし、窓も閉めている。
つまり……外部から部外者の侵入はあり得ない。
しかしこのクロと名乗る少女は俺の横に居た。
そして、俺の横に居た黒猫のクロは居ない。

「……クロ？猫の……クロ？」
「そうだよ？」
「……」
「信じてないでしょ」
「いや……ん～」

信じられるわけがない。
『朝起きたら猫が人になってました』なんて言おうものなら、脳外科辺りに連行されかねない。あるいは精神科か。
逆に信じてもらえたとしても、俺はそいつのために救急車を呼ぶ自信がある。

「……『どうしたんだ？一人か？』」
「？」
「『今日は冷えるだろうし……ウチに来るか？』」
「ッ？」

何を言い出すかと思えば……これは…。

「あなたはそう言って、私を抱きかかえてくれた。『寒いよ』って言ったら、『大丈夫』って言ってその手で包んでくれた。すごくあったかくて…心地良かったよ」
「……マジか…」

この子が言ってるのは、俺が子猫…クロを見つけた時に投げかけた言葉だ。一言一句間違っていない。
ウチに連れて帰るために抱きかかえたら、消え入りそうな小さな声で鳴いたのも覚えている。
怯えてるのかと思ったが…寒いと言ってたのか…。

「お家に入れてもらって、お風呂にも入れてもらって、ミサキと遊んで、お魚も牛乳も貰ったし、名前もくれた」
「……」
「あなたとも遊んでもらった。あなたの手が、あったかくて優しくて…撫でてくれるのが嬉しかった。」

「……マジで……クロ…なのか？」
「そうだよ？」

マジかよ…。
目を隠してる手の指の隙間から見える、少し身を乗り出して小首を傾げる少女の姿に頭が眩む。

「……じゃあ、なんで猫が人の姿になってるわけ？」
「知らないよ……私はただ…、この人とずっと一緒にいられたらいいのにって思って……そしたら急に体がこんなになって」
「ちょっと待て。自分の体が変わってったってのか？」
「うん…。どうしようか迷ったけど、あなたは寝てたし、私も眠かったから……寝たの」
「寝たのかよ！」

思わずツッコんだ。
そんな大事が真横で起きていたのに、起きなかった俺もアレだが、ぶっちゃけ起こしてくれても良かったじゃないか。
……十中八九困るだけだろうが。
というか、さらっと恥ずかしい事言われた様な…。

「…話は分かった。ちょっと待っててくれ」
「？」

実際にはまだわかっちゃいないが、とりあえずは、話を聞くよりも、この全裸（？？）の少女をなんとかするべきだと踏んだ俺は、目を隠したまま（見てないからな？）立ち上がり、ドアを開け、向かいの部屋…美咲の部屋のドアをそっと開けた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8992z/

ねこぬこっ！

2012年1月6日06時45分発行